



連載
第11回

学校での講習(児童生徒向け)

みなさん、こんにちは。昨年4月号から始めました本連載も、残すところ今回を入れて2回となってしまいました。

今回は、先生方が学校で救命講習を行う時のポイントを解説します。本稿では消防署から講師を招いていますが、自分たちだけで行う「自前講習」でもポイントは同じです。

①講習のポイント

学校側の希望を消防にはっきり伝えることが大切です。時間管理は消防任せにせず、学校で行うほうが児童生徒に負担が少ない講習になります。

1) 事前打ち合わせ

最寄りの消防に連絡をとり、事前打ち合わせをします。内容は、講習会の日時、時間、場所、受講学年と人数、希望する講習内容、当日貸してほしい物品などです。この時、必ず「実技の時間を最大限にとってほしい」と伝えます(写真1)。

2) 道具の準備を依頼する

講習に必要な道具(訓練人形・AED・フェイスシールドなど)は消防から借ります。学校にあるものを使う場合もありますので、その都度準備をします(写真2)。

3) まずは自己紹介

講習会の初めに、講師が挨拶・自己紹介をする時間を設けてください。物事を始めるには挨拶が基本ですし、簡単な自己紹介があると場がなごみ、受講者の緊張を少しでも和らげ、講師との距離感を縮めることができます。自前講習などで顔見知りであっても、最初に自己紹介をすると場が引き締まります(写真3)。

4) 説明は短めに

講習での説明は要点を絞って、なるべく短く簡潔に説明してもらいます。あまり長々と話しても、子どもたちは聞いてくれません。話が長い場合は躊躇せず“巻き”を要求しましょう(写真4)。

5) デモンストレーション

おおまかな流れを掴んでもらうため、実技練習の前にデモンストレーションを実施してもらいましょう(写真5)。



みなみそう や なかどんべつ
南 宗谷消防組合中頓別支署
すみ や
炭谷 貴博

先日、お会いした養護教諭の先生から「連載を読みましたよ!」と声をかけていただきました。ありがとうございます。

〔撮影協力〕中頓別町立中頓別小学校、中頓別町立中頓別中学校



写真1 事前打ち合わせで、学校側の希望をはっきりと伝えます



写真2 道具を準備します



写真3 講師による簡単な自己紹介の時間を設けます



写真4 説明は短く、簡潔に



写真5 デモンストレーションを依頼します



写真6 心肺蘇生法は実技をメインに



写真7 119番通報について解説を
依頼します



写真8 質疑応答の時間を設けましよう

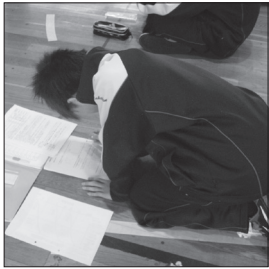


写真9 感想・アンケートを
行います



写真10 休憩時間などに
近づいてもらい、恐怖
心を取り除きます



写真11 低学年でも実際に
心肺蘇生を体験させます

6) 実技をメインに

実際に触って経験すれば効率よく覚えられます。人形や道具を使い、実技をメインに講習をすすめてもらいましょう(写真6)。

7) 適度に休憩を

集中力が低下した状態で講習を続けても効率が悪いので、適度に休憩を挟んでください。

8) 119番通報の解説

救急車を呼ぶ際の119番通報についても解説してもらいます。通報時に伝えてほしい内容や、一般電話からと携帯電話からの通報の違いなどを解説してもらいましょう(写真7)。

9) 質疑応答

講習会の終わりに、児童生徒の疑問や質問に答えてもらう時間を設けます(写真8)。

10) 感想・アンケート

講習会終了後に、感想やアンケートを記入してもらい、次回の講習会の参考とします(写真9)。

②私が行っている工夫

私はこれまで、児童生徒対象の救命講習を数多く行ってきました。その経験から得た、学年別の工夫を紹介します。

〔1〕小学校低学年向けの講習

小学校低学年を対象に救命講習会を行うことは少ないですが、小さいうちから心肺蘇生法を習うことにより、意識が根付くと思われます。

1) 何かあったら大人に伝える

人が倒れているのを発見したときなどは、近くにいる大人にそのことを伝えるよう教えます。

2) 119番通報

大人が見つからない場合には、119番通報して救急車を呼ぶことを教えます。

3) 人形に触ってもらう

低学年の児童にとって訓練人形はすごく大きく、恐怖を感じる場合があります。恐怖心を取り除くために、とりあえず触ってもらったり、児童が好みそうな漫画やヒーローもののキャラクターの名で呼んでみたり、人形に近づけるようにします(写真10)。

4) 心肺蘇生法

低学年の児童の筋力では有効な心肺蘇生法は非常に難しいと思いますが、知識を植え付けるため、実際に体験してもらいます(写真11)。

5) 説明はストレートに

低学年の児童への説明では、「こういう場合は、こうしましょう!」と理屈抜



写真12 説明はストレートに、簡潔に



写真13 周りが気になる場合は、別室での講習などを考慮します



写真14 積極的に行うことの意義を強調します

きでストレートに展開し、その上で質問があった場合には答えるようにします(写真12)。

6) 意識付け

「倒れている人を発見したら大人に伝え、救急車を呼び、手当を行い、倒れている人を助ける」という意識付けを定着させます。このことにより、人助けの大事さや命の尊さを伝えます。

〔2〕小学校高学年向けの講習

小学校高学年に対する講習会では、低学年よりも知識・筋力ともに向上しているため、それに見合った講習を行います。ただし、学年が上がるにつれて周りを意識しすぎ、遠慮がちになる傾向があるので注意が必要です。

1) 恥ずかしい

周りを意識するあまり、心肺蘇生法を遠慮がちに行ってしまうケースが見受けられます。特に口対口人工呼吸は、相手が人形であっても周りを意識して実習しない児童もいます。対策として、別室で行う、パーティションで仕切るなど、周りが気にならない環境を作る配慮が必要になる場合もあります(写真13)。

2) 積極的に

実際に心肺蘇生が必要な場面になったら積極的に行うことの意義を説明し、理解を得ます(写真14)。

3) 必要性を伝える

知識が向上しているため、心肺蘇生法の説明に、「なぜ必要なのか」の解説を加えます(写真15)。

〔3〕中学生向けの講習

中学校の生徒に対する講習会は、大人に対する講習会とほぼ同じ内容で行っています。

1) 班分け

受講人数が多い場合、班に分けて行うことが多いですが、異性を気にする生徒が多ければ、同性同士で班を編制してもらいます(写真16・17)。

2) 「なぜか」を聞いてみる

一方的に教えるのではなく、方法を説明した後に「なぜ、そうするのか」を聞いてみるなど、理解度を図りながら講習会を進めます(写真18)。

次回は教職員向け講習会について解説します。



写真15 「なぜ必要なのか」を伝えます



写真16・17 異性を気にする様子が見られる場合は、同性同士での班分けを考慮します



写真18 説明の合間に「なぜか」を聞いてみます